# 日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」⑧

## 表現が生まれるとき
### ―可能表現―

松田 美香

## 1 可能表現形式の多彩さ

九州方言には多彩な可能表現形式がある。動詞に後続するキルやユル、可能動詞、ヨー（エ・ヤス）＋動詞、これらは動作主体の能力による可能を表す「能力可能」を表すとされている。他方、動詞に後続する（ラ）ルルあるいは（ラ）レル／レルは動作主体の外部状況による可能を表す「状況可能」とされ、薩隅地域（鹿児島県全域と宮崎県の南部）を除く九州全域に分布する。また、宮崎中央部では動詞＋コトガデクル、薩隅地域では動詞＋（ガ）ナルの一形式だけがどちらの可能の意味も表す。さらに、大分県域では可能表現に関する七形式が使われている。大分方言については、後で詳しく述べる。

## 2 方言地理学的な解釈

共時的に見られる可能表現形式の数の多さやその意味領域の違いは、どのようにして成立したのだろうか。九州方言学会（一九六九）の調査結果を地図化した神部（一九九二）の「能力可能」の地図（図1）と、国立国語研究所（一九九九）の『方言文法全国地図（GAJ）』第四集一七三～一八五図に可能表現の各図がある。GAJ

図2　ＧＡＪの概略図182図「うちの孫はまだ小さくて字を知らないので読むことができない」（能力可能）の九州地域の概略図

図3　ＧＡＪの概略図183図「電燈が暗いので新聞を本を読むことができない」（状況可能）の九州地域の概略図

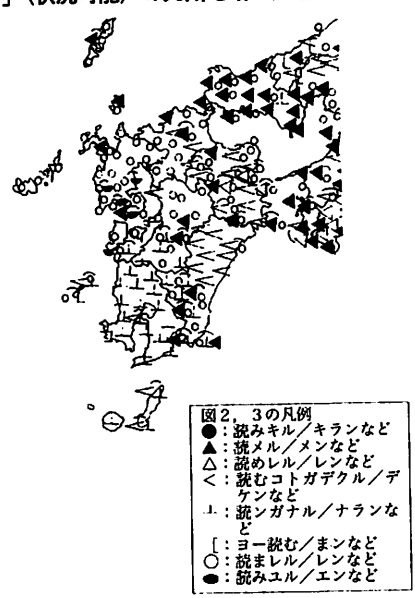
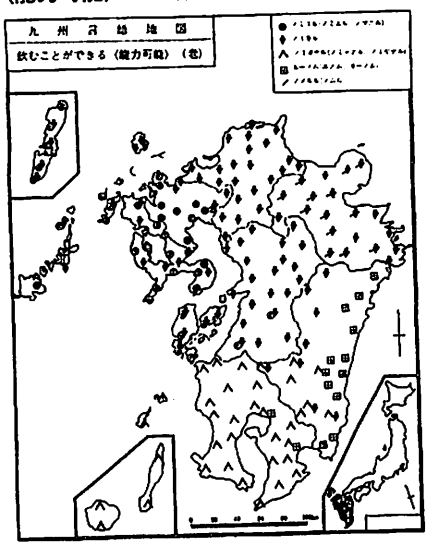



図1　神部（1992）で「盃一杯ぐらいの酒なら、私だって飲むことができる」（能力可能）から作図されたもの




から「能力可能」「状況可能」を表す図を二葉選んで九州地域の概略図を作成した（図2・3）。

方言地理学的に解釈すれば、まとまった分布を持つキルに対して、キルに分断されているユルや可能動詞がより古い形式である。また宮崎においてはコトガデクルよりヨー＋動詞の方が古い形式である。神部（一九九二）ではコトガデクルが記されていないが、宮崎県の「能力可能」として、五地点に分布がある。さらに、南部にまとまった分布を持つ（ガ）ナルはヨー＋動詞や可能動詞よりも新しい。キルと（ガ）ナルのどちらが古いかは、

これらの地図からは分からない。

九州の可能表現形式の変遷について、神部（一九九二）、渋谷（一九九三）、木部（二〇〇四）にそれぞれ考察があるが、問題となるのはナル、キル、可能動詞の三者のどれが最も新しいかである。ただし、ほぼ同時に互いに離れた土地から伝播が始まった場合、場所によっては新古が逆になる可能性もある。特に可能動詞は、否定形の場合、エル（ユル）から可能動詞が容易に作れること（飲みエン→飲メン）、二段動詞のラ抜き形（着ラルル／着ラレンに対するキルル／キレン）が大分などで観察されることから、必ずしも共通語の伝播によるものとは言えない。各地での研究が進めば、もう少しはっきりと変遷を辿ることができるだろう。

なお、これ以降（ラ）ルルはレル、（ガ）ナルはナルで表す。

## 3　認知意味論から見た可能表現
### ―メトニミーによる意味の前景化―

可能表現の各形式の出自も実にさまざまである。ユルは「得」に、キルは「切る」に遡れるし、ヨー、ヤスなどは「よく」「容易く」の音変化である。ナルは「～（が）成る」で文法化の途上にあるようだ。そして、可能動詞は、名前とは裏腹に可能専用の形式とは言えない（注1）。

さて、地図でも分かる通り、主に「能力可能」の方に形式の隆替が激しい。既存の形式が次々に「能力可能」へ取り込まれてきた理由について、神部（一九九二）には、「強調的な心意に支えられて、不断に新しい価値を志向するのが能力可能である」とある。例えば程度副詞「とても」に見られる方言形式の豊富さ、入れ替わりの激しさなどに並行した現象とするものであろう。

青木（二〇〇四）は文献資料からキルの意味について詳細に調べ、可能表現のキルは従来言われてきた「完遂」の意味からではなく、その前段階のキルの派生義〈十分な状態へ至る〉からの発展であり、〈～するのに十分だ（だから当該動作が可能だ）〉がその意味だとしている。また、その際に「話し手の心情」が要件として働くことも重要だとした。

では、可能表現に関して起きている現象を認知意味論の立場から捉え直してみるとどうだろうか。認知意味論ではある形式が多義になるとき、比喩による意味拡張が起こったと捉える。日常生活場面で補助動詞キルを使用する度に生じる含意（ニュアンス）が次第に新しい意味として使われるようになることを、メトニミー（換喩・

注2）による含意の前景化現象と言うが、前述した補助動詞キルの場合も同様のことが起こったと考えることができる。

メトニミーによる含意の前景化現象＝含意が新しい意味を作り出し、多義になる…キルの場合

←〈切断・遮断する〉（裁ちキル、立てキル…）

含意［動作の切断＝動作を止める］

←〈動作を止める〉（言いキル、思いキル…）

含意［きっぱりと止めたのは、完全・十分な状態に至ったからだ］

←〈完全・十分な状態へ至る〉（静まりキル、錆びキル…変化動詞・限界動詞）

含意［完全・十分な状態だから～できる］（九州北東部での可能の意味）

↓（読みキル、食べキル…動作動詞・非限界動詞）

含意［最後まで当該動作をする。～尽くす］

＝［完遂］　青木（二〇〇四）を参考にして作成

北九州、熊本、大分などでは雨が降りそうで降り出さない天候を指して「雨が降りキラン」と言える。擬人法と思われる用法だが、これは〈雨が降り尽くすことができない〉より〈十分・完全に雨降りという状態に至っていない〉という意味であると捉えた方が自然である。

いわゆる方言のほうが、共通語よりもはるかに日常生活場面と強い結び付きを持っているから、含意の前景化も共通語よりも進みやすい。言い方を変えれば、前景化が進む背景には、その場所に新たな可能表現形式の要求があるはずである。キルだけでなく、九州では他の形式もいくつか同様の過程を経て文法化を果たしたか、あるいはその途中にあって、可能表現に多彩な形式が存在し、複雑な様相を呈していると考えられるのである。しかし他方、南部においては一形式のみが可能の意味全般を表すようになっている。この場合、ナル、デクルという形式の原義が、両方の可能の意味を包含し得ること、キルの南下の時期がナルなどの広まりに及ばなかったこと、可能の形式が多数あるときにはその中の一つの形式を残して一本化しようとする志向もまた存在することなどが、このような現象の理由となっていることが推察される。ナルの生成と発展については中山（二〇〇四）がある。

## 4　大分方言の可能表現①
### ―豊富な形式とその意味―

大分では、可能表現にキル、可能動詞、可能動詞の語幹＋ルル・レル（以降は二重可能形と呼ぶ・注3）、レルが

表1　可能表現の三区分（大分県）

| ←動作主体内部条件 | | 動作主体外部条件→ |
|---|---|---|
| 心情・性格——能力(先天的・後天的)—内的条件 | | ——外的条件——外的強制 |
| 能力可能 | 主観状況可能 | 客観状況可能 |
| ～キル | ～(レ)レル | ～(ラ)レル |

ある。またダス、オーセル（ウスル）、コナスの三形式も加えると七種もの形式が報告されている。ただし県南部にはキルではなく宮崎にもあるヨー＋動詞を使う地域もある。

さて、これらの中で特徴的な形式は二重可能形の～（レ）レルである。全国的に見れば、高知、和歌山、兵庫、静岡の各県に分布があるが、九州では大分県域に集中して分布する。

大分における二重可能形の意味は、日高・種（一九八一）では「主観状況可能」、渋谷（一九九三）では「内的条件可能」と名付けられ、「主体内部の恒常的でない条件」を表す形式とされた。

キョー　タイチョーガ　ワリーケン　モー　イケレン
（今日は体調が悪いから［在事に］行くことができない）挾間町（現由布市）一九五四年生まれ　男

ハラ　マンプクレデ　モー　クエレン（満腹だから、もう食べることができない）中津市一九八二年生　男

表1は渋谷（一九九三）などを参考にして作成した。このように、大分方言では「可能表現の三区分がある」とされている。しかし、九州方言研究会（二〇〇四）で併用語形を詳しく調査したところ、

キョーワ　キブンガ　ワルイケン　オヨゲレン／オヨゲン／オヨギキラン（今日は気分が悪いから、泳ぐことができない）大分市一九五九年生　男

のように、実際には複数併用回答が多く報告された。この現象を解明するために二〇〇三年に行なった挾間町（現由布市）の世代別調査では、次のような結果になった（図4・5・6・7）。

調査票は二〇〇二年から行っている九州方言研究会で使用した調査票を使用し、それぞれに面接調査を行った。話者はA：一九三二年生まれの当時七〇歳・男性、B：一九五四年生まれの当時四八歳・男性、C：一九六七年生まれの当時三五歳・男性で、いずれも大分県由布市挾間町の生まれ育ちである（Cは大学時代、徳島に外住暦有り）。調査結果は、それぞれ質問文の意味分け（例えば「能力可能」）に対して、回答された形式数を分子とし、

質問数を分母として出したパーセンテージで示している。なお、「心情可能」とは、「勇気」「恥ずかしさ」などによって動作が可能／不可能になる場合を指す。また、いわゆる一・二段活用動詞にラ抜き可能形が見られたが、併用語形や意味領域から、話者Aのものは二重可能形に、話者Cのものはレルに加算した（Bは使用なし）。

この調査から、①キルの勢力が強まっていること、②反対にレルの勢力は弱まり、③レルに代わって可能動詞が勢力を得ていることが読み取れる。「勢力」とは、自らが担当する意味領域はもちろん、そこを越えて隣りの意味領域をも担当する動きのことである。また、④話者Aにおいては、キル、二重可能形、レルがそれぞれ中心とする意味を持っている。キルとレルの分布に比べると二重可能形の分布は、「内的条件可能」を中心にしながらも、全体的に分散しているように見える。これは二重可能形が新興のキルに追われて、キルからもレルからも遠い意味領域へと中心を移したことを推測させる。話者Bでは二重可能形は「内的条件可能」の一部を表すのみになって、「疲れ」「体調が悪い」「指を怪我」が条件の場合（不可能）に使われている。「足の怪我」「ものもらい」の場合はレルである。このことから他者から見えない「主体内の一時的な可能／不可能」の場合のみ、二重可能形が使われたと考えることができる。そして話者Cは、二重可能形が再びAのように全体に分散し

図4　キルの意味の年代差（大分県挾間町）

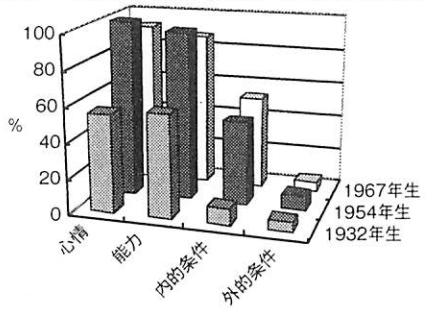



図5　レルの意味の年代差（大分県挾間町）

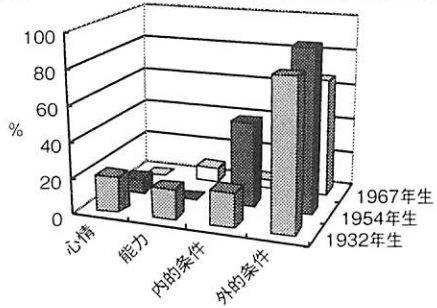



図6　可能動詞の意味の年代差（大分県挾間町）

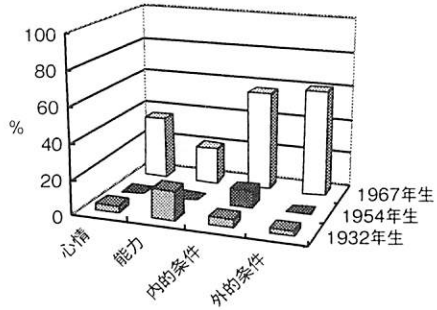
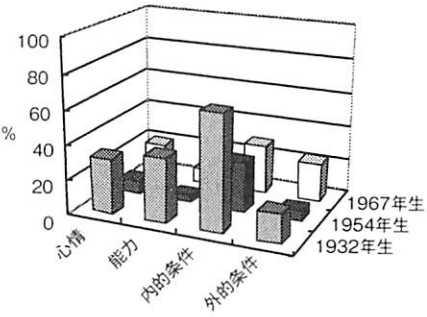


図7　二重可能形の意味の年代差（大分県挾間町）




ている。Cの内省では「したいのにできなくて残念だ、などの気持ちが入っているときに使う」形式である。これは、神部（二〇〇四）などの「主情性」を想起させるものだが、Cは三人称にも二重可能形を使用しているから、「主情性」で収まるものでもない。可能動詞の強調形として勢力を得た様相を呈しているとみるべきであろう。これらの結果を裏付ける証拠として、次に約五〇年前の大分方言のデータを見てみることにしたい。

## 5　大分方言の可能表現②
### ―昭和三〇年代の談話・音声資料から―

大分方言の談話・音声資料として、松田・日高（一九九一）（一九九六）の二冊がある。これらは、昭和三〇年代と昭和五〇年代後半の大分県各地、老若男女の会話を収めている。松田・日高（一九九一）から、約五〇年前の可能表現について、形式と意味の関係を表す表を作成した（表2）。残念ながら、「内的条件可能」の用例は見つからない。さて、形式の合計と分布を見ると、可能動詞と（ラ）ル（＝レル）がそれぞれの中心的意味を持ちながら、他の意味領域へも侵入しているのが分かる。二重可能形は若年の使用しかなく、分布が可能動詞と並行している。この頃、キルの勢力はまだ弱く、可能動詞とレルの勢いが盛んだった。そして二重可能形の見られる地域は日田市・山国町・耶馬渓町といずれも県の北西部であり、県北西部から使われ始めた可能性が高い。

中には、意味の分類がうまくできないものがあった。用例を取り出して考えてみたい。

アー　ソリャー　ソージャ　ワケー　トキニャ　ソゲン　モナ　モタンケン　モー　トシュー　トリャナー　ドーシテン　ソレホザー　モッチョラニャイカレンデ（ああ、それはそうだ。若い時にはそんなもの「杖と提灯」は持たないけれど、もう年をとればなあ、どうしてもそれぐらいは持っていなけりゃ行くことはできないよ）大南町戸次（現大分市）一九五九年に七〇歳の女性　上巻一四四頁

表２　「方言生活30年の変容」上巻の可能表現の出現数（年代・意味別）

| | | キル | 可能動詞 | 二重可能形 | （ラ）ルル | ウス | コツガナラン |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 能力可能 | 高年層 | 1 | 4 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| | 若年層 | 2 | 4 | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 内的条件 | 高年層 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 若年層 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 外的条件 | 高年層 | 0 | 3 | 0 | 2 | 1 | 0 |
| | 若年層 | 0 | 3 | 2 | 9 | 0 | 0 |
| 意味領域を特定できず | 高年層 | 2 | 3 | 0 | 5 | 0 | 0 |
| | 若年層 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 形式の合計 | | 6 | 17 | 4 | 18 | 1 | 1 |

これは、友人宅で夜に帰宅しようとするのを引きとめられ、それなら杖と提灯を貸そうと言われた時の返事である。ここでの可能の条件は何であろうか。この会話では、可能の条件が二重になっている（図８）。

また、この例とは逆に「外的条件可能」と思われる「暗くなったら帰ることができない」を帰りキランという例もある（西国東郡真玉町　一九五六年に十三歳　女　上巻三九〇頁）。これらの例から、日常会話においては、可能の条件が複雑な場合、特殊な場合もあり、最終的に何の条件を表したいかは話者次第という面もあるようだ。このようなことはあらかじめ可能の条件を設定した調査からは気づき難いので、今後も多くの異なる調査方法によるデータを集める必要がある。

## ６　大分方言の可能表現③
### ―新しい表現の誕生と住み分け―

これまで見てきたように、九州北半部には「能力可能」を現すキルが発達している。しかし、その歴史はそれほど古いものではない。それ以前は可能動詞が「能力可能」を表していたと考えられ、それ以外の可能を幅広く表していたのはレルであった。そこに「能力可能」を表す新形式キルが侵入した。侵入できたのは、「能力可能が

図８

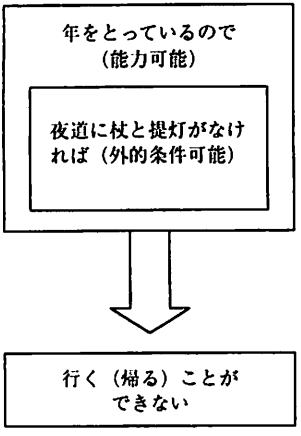


表3　二重可能形によって、可能の助動詞を再建する

| | 肯定形 | 否定形 |
|---|---|---|
| 可能動詞 | 動詞語幹＋ｅ＋ル | 動詞語幹＋ｅ＋ン |
| キル | 動詞＋キル | 動詞＋キラン |
| （ラ）ルル | 動詞＋（ラ）ルル | 動詞＋（ラ）レン |
| 二重可能形 | 動詞語幹＋e＋レル | 動詞語幹＋ｅ＋レン |

新しい価値を志向する」からだけではなく、可能動詞には「助動詞の部分が明確でない」という欠点があったからであろう。それに対し、その欠点を補うものとして生み出されたのが二重可能形なのである（表3）。とすれば二重可能形が広まった時期は、キルが侵入を始めた前後の時期と推測される。

しかし、能力可能の助動詞としてはキルの勢力が勝っていたので、二重可能形はキルとレルの及ばない（非恒常的で非顕在的（主観的）な可能）という意味領域を担うことによって、ある時期は住み分けを行なったと考えられる。それまでは「恒常的でない」という条件によりレルが担当したり、「主体内部である」という点では可能動詞が担当することもあって不安定だったであろうこの意味領域は、二重可能形を得て安定した。かくして、可能表現の三領域（三区分）が成立したと考えれば、体系の均整を保つ点から見ても納得がいく。しかし、その体系は一世代（約三〇年）の期間しかもたず、解体の方向に向かっているようである。他の形式であったらそのまま衰退の一途をたどるはずであるが、共通語の支えを得た可能動詞が再び勢力を持ち、二重可能形は無標の形式、可能動詞の強調形（注4）として居場所を得ることになった。つまり、二項対立→三領域→二領域＋無標（可能の意味を漠然と表す）という変遷があったと考えられる。

## 7 可能表現の変化―七形式が生まれた理由―

大分方言にはあと三形式、ダス、オーセル、コナスがあり、どれも共通語形の動詞として「出す」「覆せる」「こなす」に容易に遡れる形式である。使用され始めた年代を特定することはできないが、大分だけではなく九州各地でも観察されることから、新規の可能表現形式キルが広まり始めた頃に可能表現の体系が揺らぎ、その際に立て直し役の候補として次々に生まれたと考えられる。地域によってはこれらの中に文法化を果たしていると思われるものもあるが、語彙的なものに留まっているものもある。どれも現在使用が否定形に偏っており、衰退の傾向にある。しかし、それぞれが形式の原義をある程度とどめているので、可能の意味のさまざまな面を知ること

ができ、可能表現とは何か、その意味領域全体を把握するのに好材料を与えてくれている。

ダス／ダサン（～し始めることが可能／不可能）

イソガシューテ　郵便局ヤラ　行きダサン（忙しくて、郵便局などに行くことができない）

オーセル／オーセン（～ことを完了することが可能／不可能）　時間マデニ　帰リオーセンカッタ（時間までに帰ることができなかった）

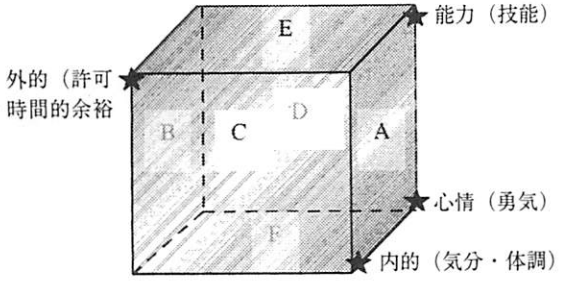
コナス／コナサン（～ことを上手く最後まですることが可能／不可能）　ボケヤケン　ゲンカンモ　掃キコナサン（ぼーっとしているから、玄関も上手く掃くことができなかった）（注5）

これらの可能の意味は、どれも動作の開始や完了などと関係を持っている点が注目される。可能表現とアスペクト形式との関係についての研究に山本（二〇〇五）がある。

## 8　まとめ―可能の意味構造を考える―

今回の大分方言の例を見ると、ある形式が勢いを得ると、入った領域から他領域へ侵入し可能の意味全体を占拠しようとする傾向があるということが分かる。九州北東部では二形式の勢力が拮抗して住み分けを行なっているが、鹿児島・宮崎南部などではある一形式の侵入・征服が成功したのである。この現象からも、可能の意味構造は連続体を成しているということが予想される。そして図4～7から、「心情」と「能力」は近く、「外的条件」はそれらからは遠く、「内的条件」は両者の中間に位置

**図9　可能の意味構造（案）**




A：B＝主体内：主体外……キル：レル
D：C＝恒常的：一時的……キル：レル～二重可能形
E：F＝客観的：主観的……レル～キル：二重可能形～キル
※それぞれの内容がどの★に近いと認識するかで、使用する形式が決定される。それを特定できない、特定しなくていい場合、二重可能形（可能動詞）を使う。

している構造を考えることができる（図9）。意味が連続している以上、一律に形式が選択される可能性は低い。個人の読み込みによっては形式が異なることもあり、可能表現の調査に併用語形が多数出て調査が難航し、結果が明確に出ない理由はここにあるので、今後の調査もこの点には十分留意しなければならない。

共通語の可能表現に比べると、九州全体としては表現が豊かであり、同時に形式の変化も激しい。言語学的に見れば、言語変化の動態とその仕組みを雄弁に語ってくれているのである。

**注**

1 「立つ」に対するタテル、「切る」に対するキレルなど。

2 認知意味論におけるメトニミー（換喩）の考え方とは、ある対象を把握したり指示する際、その対象を直接把握するのに何らかの困難をともなう場合に、別のより把握しやすいものあるいはすでによくわかっているものを参照点 reference point として活用し、本来把握したい対象を捉えるというものである。籾山・深田（二〇〇三）八七～八八頁

3 「二重可能形」は村上（二〇〇四）で用いられている名称である。

4 二重可能形が何かしらの「主情性」を伴って使われていることはわかったが、中津市一九八二年生の男性からは、「先生などに丁寧に言うときに使う」という内省を得た。現在のところは、一種の強調形と捉えるのが妥当だと思う。

5 ダスの例文は調査結果から。他は筆者の自然傍受による。

**付記**

調査に協力してくださった皆様に、助言をくださった皆様、心より感謝致します。

**参考文献**

苛木博史（二〇〇四）「複合動詞『～キル』の展開」（『国語国文』第七三巻第九号）
神部宏泰（一九九二）「九州方言における可能表現法―形式の隆替と表現特性―」（『九州方言の表現論的研究』和泉書院）
木部暢子（二〇〇四）「九州の可能表現の諸相―体系と歴史―」（鹿児島大学法文学部国語国文学研究室『国語国文薩摩路』第四八号）
九州方言学会編（一九六九）『九州方言の基礎的研究』（風間書房）
九州方言研究会編（二〇〇四）『西日本方言の可能表現に関する調査報告書』
坂梨隆三（一九六九）「いわゆる可能動詞の成立について」（『國語と國文学』十一月号）
渋谷勝己（一九九三）「日本語可能表現の諸相と発展」（『大阪大学文学部紀要』第33巻第1分冊大阪大学）
種友明・日高貢一郎（一九八一）「大分県津江地方の可能表現」（『大分大学教育学部研究紀要』五―六）
中山久美子（二〇〇四）「鹿児島県川内市における可能表現法―「ナル」「ルル・ラルル」「ダス」を中心として―」（琉球大学言語文化研究会『言語文化論叢』創刊号）
日高貢一郎（一九九一）「可能表現」（『大分県史　方言篇』大分県）
松田正義・日高貢一郎（一九九一）『方言生活三〇年の変容』（上下巻（カセット付）桜楓社）
松田正義・日高貢一郎（一九九六）『大分方言三〇年の変容』（明治書院）

松田美香（二〇〇四）「可能表現の変遷―大分郡挾間町の三世代―」（『別府大学紀要』四五号）
松田美香（二〇〇四）「可能表現の意味構造―大分方言からの考察―」（日本方言研究会第七九回研究発表会発表原稿集）
村上和也（二〇〇四）「大分方言における可能表現についての一考察」（同志社大学文学部文化学科卒業論文）
籾山洋介・深田智（二〇〇三）「意味の拡張」松本曜編『認知意味論』（大修館書店）
山本友美（二〇〇五）「九州における可能表現の変遷―アスペクト形式からの文法化―」（九州方言研究会第二〇回発表会レジュメ）
方言文法全国地図（一九九九）第4集第一七三～一八五図
小松英雄（一九九九）『日本語はなぜ変化するか―母語としての日本語の歴史』（笠間書院）

（まつだ・みか　別府大学助教授）